

# ミケランジェロの四つのピエタについての一考察

上田 久利

ミケランジェロが制作した四作のピエタ（サン・ピエトロ寺院のピエタ、フィレンチェのピエタ、パレストリーナのピエタ、ロンダニーニのピエタ）について、造形要素とミケランジェロの信仰の姿の二つの視座から考察する。

ミケランジェロにとってのピエタは自身の信仰と造形の到達点であった。キリストの受難とマリアをテーマとした具象的な彫刻ではあるが、一種の人体を構成した記号、抽象化、またシンボルである。

特に、最晩年のロンダニーニのピエタの到達点は現代の具象彫刻、あるいは抽象彫刻の一つの方向を示している。

Keywords：ミケランジェロ、ピエタ、ルネサンス、彫刻、キリスト教

## 1 はじめに ピエタについて

ミケランジェロ（Michelangelo di Lodovico Buonarroti Simoni：1475-1564）は89年の生涯において、四作のピエタを制作した。一般的にピエタ四作品とは、24歳で制作したサン・ピエトロ寺院のローマのピエタ（図1）、74歳で制作したフィレンチェのサンタマリア・デレ・フィオーレ附属博物館の通称ドゥオーモのピエタ（図2）、80歳で制作したフィレンチェのアカデミア美術館のパレストリーナのピエタ（図3）、そして、最晩年に死の数日前まで彫り続けたと伝えられるミラノ、スフォルチェスコ城のロンダニーニのピエタ（図4）を指す。

ピエタ（Pietà）とは、悲しみ、哀悼の意味である。絵画や彫刻では、キリストの母マリアと、十字架から降ろされた死せるキリストの像を指し、ルネサンス期に制作されたものが有名である。特にドイツではリーメンシュナイダーの木彫が知られている。

一方、ミケランジェロは多くの幼子を抱く聖母子の絵画や彫刻を制作している。絵画も彫刻もピエタの形態はマリアとキリストの像や絵画であるので、マリアが抱くキリストの容姿が幼子と成人の違いはあるが、聖母子像のもう一つの形でもある。ミケランジェロの時代、絵画では他にサン・ピエトロ寺院のピエタと似た構図としてベリーニ（Giovanni

Bellini：1430頃-1516）らのピエタがある（図5）。

システリーナ礼拝堂にミケランジェロ自身が描いた最後の審判を身近に感じ、彼自身が救いを求め続けた末、十字架から降ろされたキリストをマリアが抱く姿を表現したことは、彼が晩年に至った宗教観を表しているといえることもできる。

本稿では、70歳から死に至るまで、20年にわたりピエタをライフワークとして彫り続けたミケランジェロの制作に対する姿勢や、ピエタに込めたメッセージを読み解きつつ、キリスト教会、特にカトリックや正教会に置かれている、聖母子、ピエタ、マリア像について考察しながらミケランジェロのピエタについて考察する。

## 2 聖母子像

ミケランジェロのピエタに表されたキリストやマリアの表現は、後の多くの芸術家に影響を与えた。振れて螺旋状に動線を作り、視点を移動させるミケランジェロの振れの螺旋構成はルネサンスの手本となり、マニエリスムからバロックにつながる表現方法となった。ピエタにおいてミケランジェロの振れの動勢は、より抽象化され、近代彫刻の潮流となった。



図1 ローマのピエタ 1499 高さ174cm  
(サンピエトロ寺院)



図2 フィレンチェ ドーモのピエタ 1555以前 高さ226cm  
(サンタマリア・デル・フィオーレ付属美術館)



図3 パレストリーナのピエタ 1555 高さ230cm  
(フィレンチェ アカデミア美術館)



図4 ロンダニーニのピエタ 1564 高さ195cm  
(ミラノ スフォルチェスコ城)

#### (1) 聖母子像の背景



図5 ベリーニ『ピエタ』 1450 (ブレラ絵画館)

聖母子像とはマリアが幼子キリストを抱く像である。聖母子も、キリスト像も決められた様式で描かれて、教会、一般信徒の家庭において信仰対象とされている。また、ウラジミールの聖母子（Theotokos of Vladimir）（図6）など東方正教会でも多くの聖母子、キリスト像などのイコンが制作された。

それらのイコンは主に板にテンペラで描かれたものである。現在も東方正教会では描き続けられ、信仰対象となっている。ビザンチン時代からルネサンスにはモザイク、フレスコにより教会の天井、壁面にキリストやマリアが描かれ、小さなイコンの板絵は修道士により描かれ現代に伝わっている。

聖母子像が教会で飾られ、礼拝の対象として描かれたのはキリスト教公認以降、5世紀以後のことである。主にマリアが幼子のキリストを抱く形として





図6 ウラジミールの聖母子 1131

描かれるようになったのは、ローマにおいてカエサル時代に女神が子供を抱く像が信仰対象となって以降である。プトレマイオス朝最後の女王クレオパトラがカエサルの力を借りて治めていた紀元前1世紀中頃、ローマに多くのエジプト文化やエジプトの信仰が入った一つの転換期である。クレオパトラはギリシャ人であったが、従者らはエジプトの宗教を携えてきたのである。特にエジプトのイシス信仰は女神イシスが子どもの男神のホルスを抱く像を拝する。ローマ帝国の国教としてキリスト教が浸透していくにしたがい、イシス信仰を受け継ぐ人々がキリスト教化していくために、女神が子供を抱く像としてマリアがキリストを抱く形に置き換えられたと言える。そして、同様にギリシャのアフロディーテ、ローマのビーナス信仰もマリア信仰に置き換えられたものである。遡れば、オリエントのイシュタル、アシュタロツテ信仰もギリシャではアフロディーテに置き換えられて女神信仰は現在まで続いている。

## (2) 偶像としての聖母子像

ローマにおける在来の文化がキリスト教化する過程はギリシャ文化、ヘレニズム<sup>1)</sup>とキリスト教本来の偶像否定文化であるヘブライズム<sup>2)</sup>のせめぎ合いであると同時に、聖母子像はヘレニズムとヘブライズムの接点としての意味を持っている。マリアをヘレニズム的な神としてカトリック、東方正教会は現在も崇めている。5世紀におけるネストリウスの、マリアの人性、神性に遡り議論されてきたことであ

り、マリアの神性を唱えるカトリック、東方正教会<sup>3)</sup>が勝利し、マリアを神としないものは異端として取り扱われた。

この神学論争はカトリックとプロテスタントのマリアの人性、神性の議論と重なり、プロテスタントにおける偶像否定にもつながっている。当時の東方正教会ではたびたびイコノクラスム（偶像破壊）が行われ、ヘブライズムへの揺り戻しが行われた。人々にとってヘレニズムの人間賛美、ヒューマニズムは生活が豊かになればなるほど、禁欲的なヘブライズムから離れた。教会の中もギリシャ文化のヘレニズム化が進み、キリスト教のヘブライズムとの対立があった。その結果、ヘブライズムへの揺り戻しはルネサンス後の宗教改革を待たなければならなかったのである。これらのことから、聖母子やピエタはヘレニズムとヘブライズムの接点となっていると言えよう。

## 2 ピエタ四作品の考察

### (1) ローマのピエタ

ミケランジェロのピエタ四作品のうち、最初に作られたローマのピエタについて述べる。このピエタは、ミケランジェロ23歳から24歳頃の作で、現在ローマ、サン・ピエトロ寺院の礼拝堂に置かれている。因みに24歳はフィレンツェで5 m近い高さの巨像ダビデを彫った年齢でもある。同ピエタは若いマリアに抱かれた死せるキリストの像であるが、ミケランジェロのピエタ四作の中で唯一教会（礼拝堂）の中に置かれている。また、唯一ミケランジェロの署名のある作品で、ここには若さと自己顕示が現れている。キリストの死と、若い少女のままのマリアの対比がこのピエタの特徴であり、肉体の柔らかさを磨き上げた大理石で表現している。

特にこの若いマリアの表現はまさしく、カトリック教会の教義を表わしている。キリストの母マリアはキリストが十字架にかかった時にはキリストが33歳、キリストが当然壮年期、また当時とすればマリアは老年にかかった年齢であったである。このピエタ像の少し前に描かれたマンテーニャ（Andrea Mantegna: 1431-1506）の『死せるキリスト』（図7）に描かれたマリアは、老婆のマリアが嘆き悲しむ姿として描かれており、マンテーニャの描いたマリアはローマの教会の教義から逸脱している。マンテーニャの『死せるキリスト』において描いたマリアの姿、キリストの表現はミケランジェロのピエタとは対極にある。マンテーニャはマリアを老婆、キリストを大工、労働者の死として描き、当時においては

異端とも捉えられかねない表現である。宗教改革以後、特にカトリックの教義ではマリアは年をとらず、若い姿のままで昇天している。特に、反宗教改革の中で、スペインでは若いマリアが昇天する聖母被昇天の絵画が数多く制作された。ムリリョ (Bartolomé Esteban Perez Murillo : 1617-1682)、スルバルラン (Francisco de Zurbarán, 1598-1664) などの描く聖母被昇天はスペインのラファエロとも称される。

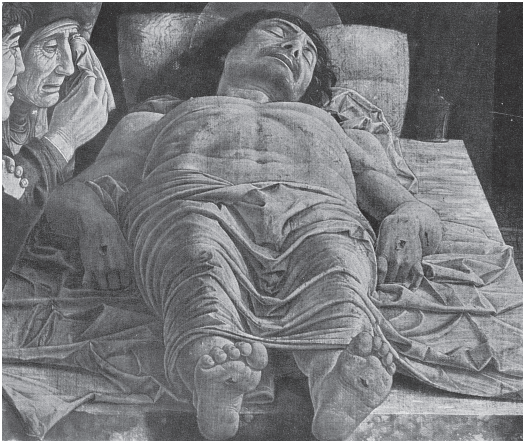


図7 マンテーニャ『死せるキリスト』 1490年代

ローマ帝国の時代、キリスト教が公認された当初からキリスト教会ではマリアの人性、神性に関して議論されてきたことである。7世紀に中国や日本に伝わったネストリウス派のキリスト教（景教）はマリアの人性、神性について論争し、マリアの人性を強調したために異端とされた。今ではマリアの人性について表現しても処罰されないことは当たり前なことではあるが、慣習としてカトリックではマリアを神として崇めているのが現状である。

ミケランジェロ24歳のピエタでは、マリアが抱えているキリストは美しい肉体である。十字架にかけられ、血まみれになったとも思えないキリスト像である。フィレンチェにて同時期に描かれたミケランジェロの円形の「聖家族」には若いマリアと、年老いたヨセフが描かれ、この絵においてもローマカトリック教会の教義に忠実であるといえる。永遠の乙女マリアは結婚しながらも汚れなく、処女であったことを表すため、夫ヨセフを生殖能力のない老人の姿として表したとも言われる。

マリアが幼子キリストを抱く像は一般的に「聖母子像」であり、ピエタは十字架から降ろされたキリストをマリアが抱く像としてルネサンス期に多く制作された。マリアがキリストを抱く形にどちらも違いなくルネサンスのこの時代特有の表現である。ルネサンス期に教会や市民、特に商人が豊かになり信仰の形を絵画や彫刻で表したことがより大きな芸術

の発展となった。特にミケランジェロのピエタや聖母子像は汚れなきマリアを表現し評価を高めた。

## (2) フィレンチェ、ドゥオーモのピエタ

ミケランジェロがローマのピエタを制作して約50年の後、改めてピエタが彫り始められた。70歳前後から89歳で没するまで三作のピエタが彫られた。誰のためでもなく、自身の墓標のように、ライフワークとして亡くなるまでの約20年間継続してピエタが彫り続けられ、造形に対しての追求が晩年までなされた。

一般的には老年となり、サン・ピエトロ寺院のピエタから50年を経て制作された三つのピエタにはローマ、サン・ピエトロのマリアの輝くような美しさは表現されていない。フィレンチェのピエタはミケランジェロが72歳から78歳の時制作したピエタであるといわれる。現在はサンタマリア・デル・フィオーレ付属美術館に置かれている。

ピエタの構想、制作時間を考えると少なくとも70歳前後から構想が練られ、彫り始められたと考えられる。また、パレストリーナ、ロンダニーニのピエタの構想も同時並行的に進められたと考えるのが自然であろう。同時期、サン・ピエトロ寺院のドーム、円蓋の建築設計も行っており、還暦を過ぎても勢威に制作を行う中で、ピエタの制作に取り掛かったことに大きな意味がある。老年になり、ピエタの制作に取り掛かり、ピエタ四作品の中で唯一添えられている老齢の自刻像に彼の宗教観が垣間見れる。それは、若き日のピエタにはマリアの肩帯のサイン「フィレンチェの人、ミケランジェロ・ボナノッティ作」の文字があるが、これは若さゆえの自己顕示であったが、老齢になって制作されたこのフィレンチェのピエタには自刻像が中心に置かれている。このミケランジェロの自刻像は母マリア、マグダラのマリアが、降下されたキリストに寄り添い、中心にニコデモまたは、アリマタヤのヨセフになぞらえている。筆者はニコデモに准えたをしたい。ニコデモは老齢になり、ひそかにキリストのもとを訪ね、どうすれば救われるのかを尋ねた。聖書の記述によれば、ニコデモはキリストを十字架につけた祭司たちから距離を置きキリストに従ったとされる。アリマタヤのヨセフは、キリストに自分の墓を提供した人物である。どちらの人物も当時の状況を考えて自分の立場どころか、命にかかわることをしたのであり、ミケランジェロはニコデモやアリマタヤのヨセフの生き方に共感し自己をこの二人に投影し、准えたのである。これはミケランジェロの信仰告白そのものである。



はなかったか。自己の救いを求めて、墓標としてピエタを制作したミケランジェロにとって、ニコデモはより身近であった。

構図、形態はニコデモを中心に、キリストの投げだした腕からマリアの方に続く円錐形を取り巻く螺旋の流れる動きは、ミケランジェロの計算した動きの一つである。これはマニエリスムの時代の特徴でもある。また、腕に残るひび割れからは、ミケランジェロはこの像が気に入らなくなり、ハンマーで腕をたたき壊した逸話が残っている。現在、左足は失われており至る所にひび割れが残る。

60歳を超え、老齢を迎え、肉体的には壮健であったかもしれないが、自身の死後に訪れる最後の審判の時を考えていたであろう。最後の審判はミケランジェロが天井に旧約聖書黙示録の世界をフレスコ画で60歳から6年を費やし、システィーナ礼拝堂の正面に描いている。「最後の審判」は単に作品のテーマであっただけにはとどまらない。最後の審判とは、キリスト再臨の時、全ての人を受ける裁きのことである。人間は必ず死ぬ存在であり、肉体の死は避けられない。キリストの復活、再臨を信じる、キリスト教の信仰者の魂は永遠に生きる。そして信仰のないものにも肉体の死は必ずあり、魂も滅び、2度目の死を迎える。それは肉体の死と魂の死であり、永遠の滅びに至る。老齢のミケランジェロは最後の審判の時、自身が救われる立場にいるのか、あるいは、永遠の滅び、魂の死に至るのかを制作を通して直面し、考えざるを得なかったのだろうし、描くことを通して、より深く理解していったと考える。キリストの十字架の死と復活、再臨と審判がキリスト教の教理であるが、キリスト再臨の時、最後の審判に臨んだ自身の救いの形として制作したのがピエタである。

システィーナ礼拝堂の最後の審判では、キリストのあげられた右手側の救われる人々と、左側の滅びに至る人々の対比が明快、明確に描かれている。ミケランジェロの描く聖書世界は、聖書の示す神学世界をわかりやすく伝え、当時の大衆に最後の審判の時の訪れを視覚的に示した。聖書の神学をいかにわかりやすく伝えるかが重要で、庶民に説明する手段に絵画や彫刻は欠かせないものであった。絵画や彫刻は文盲の聖書の役割があったが、単に識字率が低いということだけではなく、聖書は聖職者のみのものであり、庶民は読むことも許されなかった。聖職者を通して聖書、神の言葉が解釈され語られた。一般的には、庶民が聖書を読むことができるようになったのはルターがドイツ語に翻訳してからであり、プロテスタント世界のみであった。カトリック

圏では聖書の解釈や議論は異端につながり、異端として処刑された。ミケランジェロはこの時代にあつて、自己の芸術感や、思想を明確に彫刻で表した。まさしく近代の芸術は自己の思想や願いを彫刻の形を借りて表すことであり、ミケランジェロはこれを実践できた近代の芸術家であると言える。

### (3) パレストリーナのピエタ

ミケランジェロ80歳のパレストリーナ（悲しみ）といわれるピエタがフィレンツェ、アカデミア美術館にある。アカデミア美術館には24歳のダビデ像や、未完成とも思われるマタイ像や、巨石の中に埋まった人体像、アトラスなどの彫刻とともにある。人体のバランス、比例の狂いなどが見られるが、他の未完とも思える巨石を彫り刻んでいる彫刻と比べても、ミケランジェロが80歳の老齢でこの作を彫ったことを考えると驚異であり、破たんを超え傑作となっている。80歳で完成したパレストリーナのピエタは、ドゥオーモ博物館のピエタから休むことなく、時をおかず続けて制作されたと思われる。このピエタについてはミケランジェロの作を疑う論もあるが、大理石の大きな塊から2メートルを超える人体三人が彫り出され、肉体的に衰えを感じさせない量感表現が多く疑問を呈する原因となっている。また、続いて、死の数日前まで彫ったミラノのロンダニーニのピエタが存在することを考えると造形に対する迫及する情熱、驚異的体力を持つミケランジェロがイメージできる。

パレストリーナのピエタにおけるキリスト像は、サン・ピエトロ、システィーナ礼拝堂正面にフレスコで描かれた最後の審判のキリストを想起させる。システィーナ礼拝堂の「最後の審判」が60歳から66歳まで7年をかけて制作されてから後、連続して三作のピエタの制作が始まっている。ピエタ三作がどの時期から始まったかは不明であるが、システィーナ礼拝堂の最後の審判を制作して後、自分の墓碑としての彫刻制作がピエタであった。自身の信仰と造形思考の融合がキリストの十字架の死であった。

70歳前後の年齢となり、システィーナの「最後の審判」を制作中ずっと自身の死後に下される最後の審判は大きな課題であり、その後も常に向き合わざるを得なかっただろう。システィーナの「最後の審判」では向って右は滅びに向かう人たち、左は天に引き上げられる人たちが描かれている。ここには皮をむかれ殉教したバルトロメオがミケランジェロの自画像として描かれている。皮になった自画像は

自虐的な表現であるが殉教者の一人として自身を描くことで自身の信仰を表わしていると捉えられている。「最後の審判」の制作をとおしてミケランジェロは死後の魂の救いを常に目前に迫られたであろう。黙示録に描かれる最後の審判はキリスト教における中心テーマであり、単に制作テーマにとどまらず、ミケランジェロ自身に迫られた救いの完成であった。システィーナ礼拝堂の「最後の審判」の制作が終わったときからピエタの制作に没頭していく姿は常に、キリストの十字架を意識し、自身の魂の救済を求める形そのものであった。

#### (4) ロンダニーニのピエタ

ミケランジェロの最晩年、89歳の死の数日前まで彫っていたといわれる、ミラノ、スフォルチェスコ城のロンダニーニのピエタは、これまでのピエタと異なり大まかな形ができていたと思われる形を、再び違った構想のもと、彫り刻まれ、最初の形が見えにくくなっている。最初の形は彫り直されて、キリストの腕と思われる腕だけが残されている。キリストの上半身はなくなり、右腕が残され、キリストを支えていた後ろの人体の塊から新たにキリストの上半身のみが彫り出されている。残されている腕とそれに繋がる人体をイメージすると上半身は今のキリストよりもっと左の位置にあったはずで、上半身に現在残る下半身とつながる。キリストの下半身は力なく足が投げ出されている。降下されたキリストを支えるマリアも新たに彫り直され、頭部の一部がかるうじて残っている。頭部、額の一部分が新たなマリアの頭部に残され、人体も形が人体であることだけで、生身の肉体を感じさせるものはない。人体による構成であり、ピエタの精神をより単純化したものであり、ミケランジェロの抽象的な作品と言える。キリストとマリアではあるが、顔かたちは単純化され、象徴化されて記号化されている。感情を排除し、造形のみが追求されている。象徴化し、造形としてキリストとマリアを構成することにより、キリストの死を受け止め、受容していく形が明確になっている。造形を追求する姿勢自体が、ピエタのテーマが形態そのものとなっている。マリアとキリストの単純化され、記号化されたピエタはキリストの十字架の死をより明確に象徴的に伝えている。

形そのものをより単純化していく近代の表現手法を16世紀、500年前に実践したミケランジェロの造形力にただただ驚くばかりである。ロンダニーニの到達した造形は20世紀イタリア彫刻の隆盛に引き継がれている。造形の辿る道筋、人体を単純化し、

構成する手法は作家それぞれの感性に委ねられ、ミケランジェロが示した追求の過程は近代イタリア彫刻に引き継がれている。

特にファッチーニ (Pericle Fazzini : 1913-1987) やマリーニ (Marino Marini : 1901-1980) の造形に引き継がれている。ファッチーニの代表作『死せるパルチザン』はミケランジェロの奴隷像やロンダニーニの彫刻が土台となっている。またマリーニの「騎馬像」や「奇跡」はロンダニーニのピエタの単純化や構成が窺える。

### 3 まとめ

#### —信仰および造形でのミケランジェロのピエタの位置づけ

作品を真近で見ると大理石の塊に込めた彫刻家の強い意志を感じる。ミケランジェロがピエタ像を制作した時代はルネサンス期からマニエリスムと言われる時代、特に宗教改革を挟みカトリックもプロテスタントもキリスト教の教理に対して真剣な取り組みをした時代であった。キリスト教信仰は宗教改革がドイツ、オランダ、北欧に伝わり、偶像礼拝に対し厳密な取組、偶像破壊運動、イコノクラスムが起こり、教会には絵画、彫刻がなくなっていった。カトリック圏では反宗教改革の中で、絵画や彫刻は教会の大切な伝道手段となり、美術が輝いた時代であった。

ミケランジェロにとってのピエタは自身の信仰と造形の到達点であったと言える。具象的な彫刻、キリストの受難とマリアの形ではあるが、ロンダニーニのピエタにいたっては、一種の人体を構成した記号となっている。具象的な人体の彫刻ではあるが人体を構成した抽象化、またシンボルとなっている。このロンダニーニの到達点は現代の具象彫刻の一つの方向を示している。明確な創造の思想を持ち、形態を再現描写から単純化し自身の造形感覚に忠実に構成する表現は、現代のイタリア彫刻に引き継がれており、20世紀のイタリア彫刻のルネサンスとまで言われる。ルネサンスからバロックに至る芸術、特に彫刻はベルニーニに集約される。ベルニーニはミケランジェロの対極、華やかな天使が舞い、ダフネはまさしく月桂樹に変容する瞬間を表わした。また女性の肉体に触れた指は、やわ肌食い込み、優雅に、華麗である。ベルニーニはミケランジェロを骨格だけができていると評価している。まさしくミケランジェロはベルニーニのような優雅さや、動きの一瞬を表現してはいない。運動、動きを表そうとはしているが永遠に流れる時間や、単純化された構

成を見せている。ローマのピエタから50年を経てミケランジェロの彫刻は抽象化の造形思考に至り、ロンダニーニのピエタはまさに人体を表してはいるが、人体の組み合わせの抽象彫刻となっている。ミケランジェロの単純化、抽象化はベルニーニの表現とはま逆にある。ベルニーニの瞬間の動きや、人体の肉感表現、柔らかな肌にくい込む手であったり、恍惚とした表情であったり、究極の技術を見せる。

若き日のミケランジェロは、最初のピエタではベリニーニの人体表現の先駆けを思わせるが、晩年に至り、単純化や構成を見せる。ミケランジェロのピエタで表現しようとした、造形思考は現代に引き継がれ、動勢、ムーブメントは思想や価値観を表す手段となっている。

## 註

- 1) B C 4 世紀マケドニアのアレクサンドロスは10年の間にギリシャから小アジア、エジプト、

ペルシャ、インドに至る広大な地域を支配し、ギリシャ風文化を築いた。アレクサンドロスの死後、政治的には3つに分裂したが、政治経済は統一体を作りあげた。紀元前1世紀に至る3世紀の間、ギリシャの多神教、人間中心主義（ヒューマニズム）の価値観はローマ帝国に引き継がれ、現代にいたっている。

- 2) 唯一の神ヤハウエのみを信じ、神を生活の中心としてきたヘブライ人の思想や文化で、ユダヤ教ではメシアによる救済、キリスト以後では再臨のキリストを強調する。ユダヤ教やキリスト教の根底をなす思想である。
- 3) ローマ帝国でキリスト教が国教化され、ローマカトリック（正当）に対してビザンチンでは東方正（オーソドックス）教会といわれギリシャがオスマン帝国に支配されるようになりロシア正教会（ハリストス）などの正教会として発展した。キリストやマリアや聖母子を描いた聖画（イコン）を祭壇に飾り、礼拝の対象としている。

